駱賓王「帝京篇」と則天武后の洛陽駐輦

種村由季子

一　問題の所在

初唐の詩人駱賓王（？～六八四）の「帝京篇」は、『舊唐書』本傳に「當時以爲絶唱（當時以て絶唱と爲す）。」とあるように、發表當初より人々の高い評價を得た彼の代表作である。そもそもこの作品には、吏部侍郎の求めに應じて提出されたという經緯があり、駱賓王はこれに添えて次の啓文を呈上している。

賓王啓。昨引注日、垂索鄙文。拜手驚魂、承恩累息。……賓王散樗易朽、蟠木難容。雖少好讀書、無謝高鳳。而老不曉事、有類揚雄。徒以易象六爻、幽贊通乎政本、詩人五際、比興存乎國風。故體物成章、必寓情於小雅、登高能賦、豈圖容於大夫。

賓王啓す。昨　引注の日、鄙文を垂索せらる。手を拜して魂を驚かせ、恩を承けて息を累む。……賓王は散樗にして朽ち易く、蟠木にして容れ難し。少きより書を讀むを好むと雖も、高鳳に謝する無し。而も老いて事を曉らざること、揚雄に類する有り。徒だ易象の六爻は、幽贊　政本に通じ、詩人の五際は、比興　國風に存するを以てす。故に物を體し章を成すも、必ず情を小雅に寓せ、高きに登りて能く賦すも、豈に圖らんや　大夫に容れられんことを。

（「上吏部侍郎帝京篇啓」、『駱臨海集』巻一）[1]

ここでは、文學の政治的效用を掲げ、『詩經』における比興諷諫の精神に則ろうとする創作態度が表明される。そして「物を體して章を成」す行爲も、必ず教化作用を重視せねばならないとして、この作品に諷刺の意圖があることを明確に宣言するのである。

この啓文を受け取った吏部侍郎の名を、裴行儉（六一九～六八二）と言う。咸亨元年（六七〇）から調露元年（六七九）にかけて在任し手腕を振るう一方、武將としても活躍し、任期後半の約四年間は、實際に指揮官として西域各地に轉戰した。[2] 駱賓王自身も、この裴行儉の推擧により從軍し、咸亨元年（六七〇）に吐蕃へ、更に咸亨三年（六七二）には雲南へ遠征している。[3]「帝京篇」が獻上されたのは、兩者が共に長安にいた頃と考えられ、その期間は、駱賓王が從軍から歸京した上元元年（六七四）から裴行儉が出征する上元三年（六七六）までの三年

間に絞られる。創作年も、これに前後する時期であろう。[4]

さて、この作品に關しては從來、漢代の故事に擬えて當時の王侯貴族や遊俠たちの驕奢を批判し、自己の不遇を訴えて官途に就かんとする駱賓王の個人的な意圖があったとされ[5]、また「絶唱」の理由については、駱賓王と同じく下級官僚として不遇に甘んじる人々の共感があったとの見解がなされてきた[6]。だが、權力者の奢侈については、比興諷諫の作品としては既に詠い古されたモチーフと言ってよく、例えば揚雄の「甘泉賦」や司馬相如の「子虛賦」、樂府では「長安有狹邪行」など、過去の類例は枚擧に暇がない。ここに及んで駱賓王が貴顯の奢侈を譏ったからと言って、果たしてそれが當時の人々を殊更に惹き付ける内容であったかは疑問である。

ところで、「帝京」とは、言うまでもなく皇帝の居處を指す。だが駱賓王の「帝京篇」には、作中皇帝の姿が一切描かれない。このことは、他の都城作品と比較しても注目に値する。詳細は後述するが、實はこれには、則天武后の臺頭や洛陽行幸といった當時の政情との密接な關連性が指摘でき、この作品の意圖するところについては、多分に再考の餘地があると筆者は考える。

そこで、本稿ではまず、「帝京篇」の創作背景及びその諷諫内容について具體的に檢證し、これらのことを通して、この作品の文學史上の意義について考察したい。

二　皇帝のいない「帝京」

次に擧げるのは、「帝京篇」の冒頭箇所である（以下、本文の各句には通し番號を付し、換韻部分には鉤記號を付す）。

1　山河千里國　　山河　千里の國
2　城闕九重門　　城闕　九重の門
3　不覩皇居壯　　皇居の壯（さか）んなるを覩（み）ずんば
4　安知天子尊　　安くんぞ天子の尊きを知らんや
5　皇居帝里殽函谷　　皇居　帝里　殽函の谷
6　鶉野龍山侯甸服　　鶉野　龍山　侯甸の服
7　五緯連影集星躔　　五緯　影を連ねて星躔に集まり
8　八水分流橫地軸　　八水　流れを分かちて地軸を橫（ほしいまま）にす
9　秦塞重關一百二　　秦塞の重關　一百二
10　漢家離宮三十六　　漢家の離宮　三十六
11　桂殿陰岑對玉樓　　桂殿　陰岑として玉樓に對（むか）ひ
12　椒房窈窕連金屋　　椒房　窈窕として金屋に連なる

起句の「山河」は、堅固にして悠久なる國土というイメージを有する詩語である。杜甫「春望」の一句「國破れて山河在り」を想起しても明らかなように、ここでは特に崤山や函谷關、渭水や涇水といった自然の要害に惠まれた長安一帶の地域を指す。このように、「帝京篇」は、都の地勢と壯大な宮殿の樣子から說き起こし、「安くんぞ天子の尊きを知らんや」と皇帝の威容を讚えて、全九十八句に亘る長大な作品を展開してゆく。

さて、淸の陳熙晉によって既に指摘されるものの、この作品には、漢代都城賦の代表的作品である班固の「西都賦」（『文選』卷一）や、張衡の「西京賦」（『文選』卷二）を踏まえた字句表現が散見される。例えば前出の「帝京篇」冒頭十二句に着目すれば、

左據函谷、二崤之阻　（班固「西都賦」）
左有崤函、重險　（張衡「西京賦」）
皇居帝里崤函谷　（駱賓王「帝京篇」）

五緯相汁以旅于東井（張衡「西京賦」）
五緯連影集星躔　（駱賓王「帝京篇」）

離宮別館三十六所　（班固「西都賦」）
漢家離宮三十六　（駱賓王「帝京篇」）

と、字句表現の近似は一目瞭然であろう。また注目すべきは、その内容構成にもある。「帝京篇」では、まず長安城の険阻な自然環境について述べ、次に五星が集結するといった瑞祥等を嘉し、その後で城内の宮殿の様子を描いて、都城整備までの経緯を語る。このような作品展開は、「西都賦」、「西京賦」と軌を一にするものである。では、この後の展開はどうか。次に、場面は宮城内部へと進んでいく。

13　三條九陌麗城隈　　三條 九陌 城隈に麗き
14　萬戸千門平旦開　　萬戸 千門 平旦に開く
15　複道斜通鵁鶄觀　　複道 斜めに通ず 鵁鶄觀
16　交衢直指鳳凰臺　　交衢 直ちに指す 鳳凰臺
17　劍履南宮入　　劍履 南宮 入り
18　簪纓北闕來　　簪纓 北闕 來たる
19　聲明冠寰宇　　聲明 寰宇に冠たり
20　文物象昭回」　　文物 昭回に象る
21　鉤陳肅蘭戺　　鉤陳 肅たる蘭戺
22　璧沼浮槐市　　璧沼 槐市を浮かぶ
23　銅羽應風迴　　銅羽 風に應じて迴り
24　金莖承露起　　金莖 露を承けて起つ
25　校文天祿閣　　文を校す 天祿閣
26　習戰昆明水　　戰を習ふ 昆明水
27　朱邸抗平臺　　朱邸 平臺に抗し
28　黃扉通戚里」　　黃扉 戚里に通ず

夜明けと共に「萬戸千門」が一齊に開放されると、そこには壮大な宮中の光景が廣がっており、「劍履」「簪纓」を帯びた官僚たちが盛んに往來している。更に、護衛を司る「鉤陳」や書物の校訂を行う「天祿閣」など、宮中に建ち竝ぶ役所を描き、職務に從事する臣下たちの様子を述べる。このような臣下の描寫は、先述の都城賦作品にもやはり見える。だが、ここでは「帝京篇」との重大な相違點も見出される。例えば「西都賦」では、

左右庭中、朝堂百寮之位。蕭曹魏邴、謀謨乎其上。佐命則垂統、輔翼則成化、流大漢之愷悌、盪亡秦之毒螫。故令斯人、揚樂和之聲、作畫一之歌、功德著乎祖宗、膏澤洽乎黎庶。

左右庭中に、朝堂百寮の位あり。蕭曹魏邴、其の上に謀謨す。命を佐けては則ち統を垂れ、輔翼しては則ち化を成し、大漢の愷悌を流きて、亡秦の毒螫を盪す。故に斯の人をして樂和の聲を揚げ、畫一の歌を作らしめ、功德 祖宗に著れ、膏澤 黎庶に洽し。

と、始めに蕭何、曹參、魏相、邴吉ら歴代功臣の名を列擧し、政務に勤しむ臣下の姿を描くが、續いて「命を佐けては則ち統を垂れ、輔翼しては則ち化を成す」と、歴代の皇帝が臣下の輔弼を得て帝業を成し遂げてきたことを述べ、更に「祖宗」[7]、つまり高祖と宣帝の名を示して、皇帝の功德により天下に泰平がもたらされたことを讃えるのである。また「西京賦」においても、

内有常侍謁者、奉命當御、蘭臺金馬、遞宿迭居。

内には常侍　謁者有り、命を奉じ御に當たり、蘭臺　金馬、遞ひに宿り迭ひに居る。

と、皇帝の政務や飲食などに近侍する臣下たちについて述べ、間接的に皇帝の存在が描かれている。

一方、「帝京篇」では、冒頭高らかに「安くんぞ天子の尊きを知らんや」と述べるにも拘わらず、實際の皇帝の政務の様子については描かれず、ただ「聲明　寰宇に冠たり」と臣下の威風堂々たるさまが稱贊されるのみである。これは聊か奇妙なことではなかろうか。尤も、一介の下級官僚に過ぎない駱賓王にとって、皇帝を間近に見る機會は無きに均しい。描かなかったのではなく、描けなかったとも考えられよう。だが、これまで見てきたように、「帝京篇」が、漢代の都城賦に題材を取りながら、皇帝の描寫についてはこれを踏襲しないのは却って不自然である。これには何らかの理由があると見るべきである。

三　皇后の洛陽行幸

駱賓王が「帝京篇」を創作したのは、唐の第三代皇帝、高宗李治（在位六四九～六八三年）の御代である。實はこの頃、洛陽行幸が頻繁に行われ、皇帝は度々長安を不在にしていた。左にその詳細を示す[8]（後掲年表參照）。

	洛陽行幸	長安還御	期間
第一回	顯慶二年（六五七）正月	顯慶三年（六五八）二月	十五ヶ月
第二回	顯慶四年（六五九）十月	龍朔二年（六六二）四月	三十二ヶ月
第三回	麟德二年（六六五）正月	麟德二年（六六五）十月	十一ヶ月
第四回	咸亨二年（六七一）二月	咸亨三年（六七二）十一月	二十二ヶ月
第五回	上元元年（六七四）十一月	上元三年（六七六）三月	十八ヶ月
第六回	上元四年（六七九）正月	永隆元年（六八〇）十月	二十三ヶ月
第七回	永淳元年（六八二）四月	弘道元年（六八三）十二月、高宗崩御（以後武后は洛陽に定住）。	二十一ヶ月

洛陽は、古來より長安と共に「二京」と稱されて文化的にも發展し、歴代王朝の皇帝もこの地に深く親しんできた。だが、高宗のように在位三十四年の間に計七回もの行幸を行った皇帝は稀であろう。更に高宗の行幸は、その滯在期間の長さも極めて異例である。例えば第二回目の行幸は、三十二ヶ月もの長期に亘っており、全七回の駐輦期間を總計すると、實に十一年にも及ぶ。つまり高宗は、その治世のおよそ三分の一を首都長安ではなく、洛陽で過ごしているのである。何故、高宗はかくも洛陽行幸を行わなければならなかったのか。

陳寅恪はこの行幸の要因について、洛陽の娯樂的要素に加え、經濟的な利便性を擧げる[9]。確かに、この頃長安は度々深刻な饑饉に見舞われており、特に最後の第七回目の行幸については、「上　關中は饑饉、

米は斗ごとに三百なるを以て、將に東都に幸せんとす」[10]と記錄されるように、長安の食糧缺乏がその背景にあった。その點洛陽は、煬帝によって開鑿された大運河の起點に位置し、江南の物資が豐富に集まる商業都市として、十分な食糧の確保が保障されていたのである。だが、七回の行幸全てにおいて、長安の食糧事情が直接の原因だったかと言えば、必ずしもそうではない[11]。

實はこの頃、高宗は病氣を理由に長らく政務から遠ざかっており、代わりに皇后である則天武后が政治を執り行っていた。行幸の意思も、高宗自らではなく實權を握る武后の決定のもと行われていたと考えられる。そしてこれには、武后のある政治的な思惑が大きく關係していたのである。

永徽六年（六五五）、武后は皇后册立に際して、その出身の卑賤さに加え、かつて高宗の父、太宗李世民（在位六二六～六四九）の後宮に仕えていた經歷から、特に太宗恩顧の重臣らの激しい反發を受けた。この中心人物となったのが、外戚の長孫無忌と、于志寧及び褚遂良である。主たる反對派には、更に褚遂良を擁護した韓瑗と來濟が加わる。凌煙閣に名を刻む老臣長孫無忌を中心として、彼らは太宗と深い信頼關係で結ばれていた。この抵抗勢力の反對を押し切って卽位した武后は、以後、彼らを徹底的に排除してゆく。武后はまず、自分と對峙する舊臣を次々と邊境に追放し、更に首都長安を棄てて彼らの影響力の少ない洛陽に據點を遷し、新たにこの地に自己の政治基盤を確立しようと目論んだのである。

さて、「帝京篇」が發表されたのは、まさにこの第五回目の行幸期間と重なる。折りしもこの頃、洛陽では武后の活動がいよいよ顯在化する。上元二年、洛陽宮では大規模な修築工事が開始され、また洛陽郊外の龍門では、武后の姿を寫し取ったとされる巨大な盧遮那佛の開眼式典が盛大に行われるなど、饑饉に喘ぐ長安の窮狀を餘所に、洛陽は首都さながらの活況を呈していたのである。更にこの年より、朝政補佐のため北門學士が召集され、武后を中心とする政治體制が着實に整備されていった。かかる政治狀況の中、高宗は遂に武后に讓位の意志を示すに至る。

（上元）二年、上苦風眩甚、議使天后攝知國政。中書侍郎同三品郝處俊曰、「天子理外、后理內、天之道也。昔魏文著令、雖有幼主、不許皇后臨朝、所以社禍亂之萌。陛下柰何以高祖、太宗之天下、不傳之子孫而委之天后乎。」中書侍郎昌樂李義琰曰、「處俊之言至忠、陛下宜聽之」上乃止。

（上元）二年、上 風眩に苦しむこと甚だしく、天后をして國政を攝知せしめんことを議す。中書侍郎同三品郝處俊曰はく、「天子 外を理（をさ）め、后 內を理（をさ）むるは、天の道なり。昔 魏文 令を著（あら）はし、幼主有りと雖も、皇后の臨朝するを許さず、社 禍亂の萌たる所以なり。陛下 柰何ぞ高祖、太宗の天下を以て、之を子孫に傳へずして之を天后に委ぬるか」と。中書侍郎昌樂李義琰曰はく、「處俊の言は至忠なり、陛下 宜しく之を聽くべし」と。上 乃ち止む。

（『資治通鑑』卷二百二、唐紀十八、高宗上元二年）

宰相郝處俊の諫言により、幸いこの時には皇后が帝位に卽くという事態は回避されたが、この時より、周圍は女帝誕生の可能性を否應なく意識せざるを得なくなっていったのではないだろうか。武后が武周

革命によって正式に即位し、唐王朝の斷絶を招くには更に二十年以上の歳月を要するが、當時既に武后の野心を察知した者は、それぞれの思惑のもと、或いは率先して與し、或いは靜觀し、或いは恐らく憤怒したことであろう。

四　「帝京篇」の創作意圖

ところで、駱賓王の「帝京篇」には同名の先行作品がある。すなわち唐の第二代皇帝、太宗李世民御製の「帝京篇十首」である。[12] この作品は、貞觀十九年（六四五）に石碑として立刻され、[13] 太宗が自らの起居及び所感を述べた十首の連作である。

其二

巖廊罷機務　巖廊　機務を罷め
崇文聊駐輦　崇文　聊か輦を駐む
玉匣啓龍圖　玉匣　龍圖を啓き
金繩披鳥篆　金繩　鳥篆を披く
韋編斷方續　韋編　斷ちては方に續ぎ
縹帙舒還卷　縹帙　舒べては還た卷く
對此乃忘憂　此に對して乃ち忘憂し
欹枕觀墳典　枕に欹りて墳典を觀る

其八

歡樂難再逢　歡樂　再び逢ひ難く
芳晨眞可惜　芳晨　眞に惜しむべし
玉酒泛雲罍　玉酒　雲罍に泛かび
蘭肴陳綺席　蘭肴　綺席に陳ぬ
千鍾合堯禹　千鍾　堯禹に合ひ
百獸諧金石　百獸　金石に諧ふ
得志重寸陰　志を得て寸陰を重んじ
忘懷輕尺璧　懷を忘れ尺璧を輕んず

（『文苑英華』卷百九十二）

第二首では、崇文館への臨幸について述べ、多忙な政務の合間を縫って書物の熟讀に沒頭する樣子を描く。また第八首では、宮中の盛大な宴について述べ、「堯禹」のごとく大杯を傾けつつ、「百獸」が舞來るほどの素晴らしい音樂に聽き入る樣子を、深い充足感と共に詠う。またその序文には、「余 百王の末を追蹤し、心を千載の下に馳す。慷慨 懷古し、彼の哲人を想ふ。庶はくは堯舜の風を以て、秦漢の弊を蕩はん。咸英の曲を用て、爛熳の音を變へん」[14] とあり、唐王朝の事實上の創業主として、「帝京」を統べる太宗の自信と自負に溢れている。

だが、今やその長安は、武后の洛陽行幸によって首都としての地位を著しく失墜させており、李氏の唐王朝もまた武后によってその權威を奪われつつあった。このような時代背景のもと、駱賓王が太宗と同題の作品を發表したことは、單なる偶然の一致であろうか。管見の限り、これ以前に同題の作品は見られず、駱賓王がこの御製作品を意識して創作したことは疑い無い。[15] 勿論、「帝京篇」を「絶唱」と稱した當時の人々にとっても、腦裏には當然、この太宗の「帝京篇十首」が過ぎっていた筈である。つまり、駱賓王の「帝京篇」とは、それ自體に太宗の「帝京篇」を想起させ、太宗御代の長安を懷古させる效果を持つ作品であると言える。

さて、このように、當時の世情に卽して「帝京篇」を捉え直すとき、貴顯の奢侈に對する諷刺という從來の解釋とは自ずと矛盾が生じる。次に、「帝京篇」における王侯貴族や遊俠、妓女の描寫について檢證し、この作品の創作意圖について改めて問い直したい。

37 王侯貴人多近臣　　王侯　貴人　近臣多く
38 朝遊北里暮南鄰　　朝(あした)に北里に遊び　暮には南鄰
39 陸賈分金將燕喜　　陸賈　金を分かちて將に燕喜せんとし
40 陳遵投轄正留賓　　陳遵　轄を投げて正に賓を留む
41 趙李經過密　　趙李　經過　密にして
42 蕭朱交結親」　　蕭朱　交結　親し
43 丹鳳朱城白日暮　　丹鳳　朱城　白日暮れ
44 青牛紺幰紅塵度　　青牛　紺幰　紅塵度(わた)る
45 俠客珠彈垂楊道　　俠客　珠彈　垂楊の道
46 倡婦銀鉤采桑路」　　倡婦　銀鉤　采桑の路
47 倡家桃李自芳菲　　倡家の桃李　自(おのづか)ら芳菲
48 京華遊俠盛輕肥　　京華の遊俠　輕肥を盛んにす
49 延年女弟雙飛入　　延年の女弟　雙飛して入り
50 羅敷使君千騎歸　　羅敷の使君　千騎して歸る
51 同心結縷帶　　同心　結縷の帶
52 連理織成衣　　連理　織成の衣
53 春朝桂樽樽百味　　春朝の桂樽　樽百味
54 秋夜蘭燈燈九微　　秋夜の蘭燈　燈九微
55 翠幌珠簾不獨映　　翠幌　珠簾　獨り映ぜず
56 清歌寶瑟自相依　　清歌　寶瑟　自(おのづか)ら相ひ依る
57 且論三萬六千是　　且(か)つ論ず　三萬六千の是なるを
58 寧知四十九年非」　　寧(いづく)んぞ知らん　四十九年の非なるを

ここではまず、「陸賈」や「蕭朱」（蕭育と朱博）といった漢代の王侯貴族たちの酒宴について述べる。朝夕構わず繰り廣げられる彼らの遊興ぶりは豪快で、客を引き留めるために車の留め金を棄てた「陳遵」など、型破りである。次に、43句目以降では、遊俠と妓女の享樂へと場面が移る。「羅敷の使君　千騎して歸る」とは、羅敷に横戀慕する使君の行動を指す。出典となる「陌上桑」では、羅敷は使君の誘惑を拒絶して稱贊されるが、「帝京篇」では、續いて「同心　結縷の帶、連理　織成の衣」と、男女の深い契りが謳われ、使君はめでたく羅敷と結ばれることとなるのである。これについて、從來の解釋は、このような男女の一生を「四十九年の非」と批判し、長安の風俗の亂れを危惧するものとして捉えてきた。確かに、放縱の限りを盡くす遊俠たちの姿は、贅澤や放蕩への批判とも取れる。彼らの生態を描いた作品は多く樂府において見受けられるが、中でも曹植の「白馬篇」や「名都篇」は、むしろそのような遊俠たちの生き方を肯定し、その剛强な氣風を稱贊したものである。[16]

名都多妖女　　名都　妖女多く
京洛出少年　　京洛　少年出づ
寶劍直千金　　寶劍　直千金
被服光且鮮　　被服光(かがや)かしく且つ鮮やかなり
……
歸來宴平樂　　歸り來たりて　平樂に宴す

美酒斗十千　美酒は斗に十千
膾鯉臑胎鰕　鯉を膾にし　胎鰕を臑にし
寒鼈炙熊蹯　鼈を寒り　熊蹯を炙る
鳴儔嘯匹旅　儔を鳴び　匹旅に嘯け
列坐竟長筵　坐を列ねて長筵に竟る
連翩擊鞠壤　連翩として鞠壤を擊ち
巧捷惟萬端　巧捷たること惟れ萬端
白日西南馳　白日　西南　馳せ
光景不可攀　光景攀むべからず
雲散還城邑　雲散　城邑に還り
清晨復來還　清晨　復た來たり還る

（曹植「名都篇」、『文選』巻二十七）

ここでは、都のいなせな遊俠たちと艶やかな妓女を描き、彼らの豪華盛大な宴の様子を詠む。だが、彼らの服装や奢侈に對する批判の意圖は何處にも無く、却って、自由且つ豪快に生きる彼らの强烈な存在感を活寫することに徹している。

また、駱賓王自身について見ると、彼には元來遊俠を好む性質があった。『舊唐書』本傳には、「嘗て「帝京篇」を作り、當時絶唱と爲す。然るに落魄無行にして、好く博徒と遊ぶ[17]」と、遊俠の徒と共に勝手氣儘な生活に興じていたことが記される。また、自らの經歴を述べた「疇昔篇」でも、「少年英俠を重んじ、弱歳衣冠を賤しむ。既に寰中の賞を託し、方に膝下の歡を承けん[18]」と、義俠に憧れた少年時代を回想している。更に「帝京篇」に登場する王侯貴族たちについても、「陳遵」や「朱博」は、傳統的貴族と言うよりは、成り上がりの元遊俠の輩たちである。このように見ていくと、「帝京篇」において描かれる長安の人々の盛大な暮らしぶりは、必ずしも駱賓王にとって批判の對象であったとは斷言できまい。むしろ、かつての都の人々の生き生きとした繁榮を讃え、懐かしむものではなかっただろうか。駱賓王の生年については諸説あるが、少なくとも太宗朝の後期の六三〇年代には出生していたとされる[19]。往時の繁榮を知る駱賓王にとって何より耐え難かったのは、活氣を喪失した現今の長安だったのではないか。

67　相顧百齡皆有待　　相ひ顧みるに　百齡　皆待つ有り
68　居然萬化咸應改　　居然として萬化咸　應に改まるべし
69　桂枝芳氣已銷亡　　桂枝の芳氣　已に銷亡し
70　柏梁高宴今何在」　　柏梁の高宴　今何くにか在る

ここでは、漢の榮枯盛衰を偲び、かつて美女と美酒に醉い癡れた長安の衰亡を詠む。從來の解釋ではこれを、長安の將來的な退廢を危惧し、人々の奢侈を批判するものとして捉えてきた。だが、ここで駱賓王が主張せんとするのは、決してそのような悠長な警告ではあるまい。既に見てきたように、現在の長安は、武后によって「已に」衰亡の危機に陥っていたのであり、駱賓王が警鐘を鳴らすのは、彼自身が「今」直面する長安の危機に對するものに他ならない。時を同じくして、この頃相次いで都城を詠む長篇作品が發表されている。その中で、例えば盧照鄰が「長安古意」において、

節物風光不相待　　節物　風光　相待たず
桑田碧海須臾改　　桑田　碧海　須臾にして改まる

昔時金階白玉堂　昔時の金階 白玉の堂
即今唯見青松在　即今 唯だ見る 青松の在るを

（『盧照鄰集』巻二）

と、やはり「帝京篇」と同様にその衰亡を詠み、青松のみを殘す寂寥とした「即今」の都を嘆いて、在りし日の長安の隆盛を懐古すれば、また一方では、劉希夷が「公子行」において、

天津橋下陽春水　天津橋下 陽春の水
天津橋上繁華子　天津橋上 繁華の子
馬聲廻合青雲外　馬聲 廻合す 青雲の外
人影搖動綠楊裏　人影 搖動す 綠楊の裏

（『文苑英華』巻百九十四）

と、洛陽城下の天津橋を描き、そこに行き交う人々の賑わいを謳う。初唐において現れるこれらの作品群の存在は、二京の繁榮をそれぞれに詠んだとする解釋では濟ますことのできない問題を孕んでいるのではないだろうか。

思えば、そもそも班固が「西都賦」「東都賦」からなる「兩都賦」を創作した背景には、後漢の建國當初において長安派と洛陽派の間で首都をめぐる議論があったことに起因する。[20] 班固の「兩都賦」は、結論として洛陽定都に贊同するものであるが、それ以前には、長安の優位性を主張する杜篤の「論都賦」などがあり、漢代の都城賦創作の背景には、首都選定に關わる問題が密接に絡んでいたという事情が確認される。ならば、駱賓王が「帝京篇」の冒頭箇所において、長安の地勢の利や瑞祥による都の正統性を強調し、班固の「西都賦」や張衡の「西京賦」の字句に倣ったのも、單に典故表現というだけでなく、こうした首都問題に關わる都城賦の創作背景そのものを踏襲してのことではなかっただろうか。

五　「絶唱」の波紋

以上、「帝京篇」の分析を通して、この作品が從來言われるような王侯貴族や遊俠に對する奢侈批判を目的とするものではなく、太宗朝の長安の繁榮を懐古する作用があったことを指摘した。だが、裏を返せばこれは、時の權力者に對する批判とも受け取られかねない。然るに何故、駱賓王は、敢えてそのような危險を冒したのだろうか。

この疑問は、彼の政治的立場を考慮すれば自ずと氷解しよう。何故なら駱賓王は、元々太宗派の人々と親交があり、自身も李唐室に對して厚い忠義心を抱いていたからである。これには、彼が幼少期より過ごした山東における地緣と深い關係がある。[21] 武后と對立した舊來勢力とは、そもそも太宗が秦王時代に山東に軍事據點を置いたことに遡る。太宗は即位後、李勣や褚遂良ら山東の人士を特に重用したため、武后が實權を掌握した後も尚、山東の地には太宗所緣の舊勢力の人々が多く殘存していたのである。駱賓王が、彼らとの結びつきを深めていく中で、武后の專横に不滿を募らせていったのもある意味では無理からぬことだったのではないだろうか。後年、彼が舊來勢力の反亂である徐敬業の亂に加擔するに及ぶのは、このような政治的立場を如實に現すものであろう。反亂に際し、駱賓王は檄文を起草して天下に蹶起を呼びかけている。

一抔之土未乾、六尺之孤安在。儻能轉禍爲福、送往事居。共立勤王之勳、無廢舊君之命。凡諸爵賞、同指山河。

一抔の土 未だ乾かざるに、六尺の孤 安くにか在る。儻し能く禍を轉じ福と爲さば、往を送り居に事へん。共に勤王の勳を立て、舊君の命を廢れしむること無かれ。凡諸の爵賞よ、同に山河を指ささん。

（「代李敬業傳檄天下文」、『駱臨海集』卷十）

「六尺の孤」とは、高宗亡き後に殘された幼君中宗を指す。ここでは、正統な後繼者である中宗が、父帝崩御後、幾許も無くして幽閉されるという事態に憤怒し、武后による王朝の「禍」を「福」に轉じて李氏唐室を再興せんとする激烈な決意を述べる。そして天下の同胞に對し、共に「山河」すなわち長安の恢復を目指すことを喚起するのである。このように、「山河」は、駱賓王ら舊勢力にとって首都長安の象徴として用いられた。そもそもこの字句が長安を象徴する語となるのは、前漢の建國に際し、劉敬が「被山帶河」の地と稱して長安定都を主張したことに由來する。[22] ここで「帝京篇」の冒頭箇所を振り返れば、「山河千里の國」と、確かに「山河」の語より詠い出されたことが思い出され、改めて長安に對する駱賓王の強い思い入れが推察される。

更に、「帝京篇」の呈出を求めた吏部侍郎の裴行儉であるが、彼は北朝以來の門閥貴族の家系であり、その出自からも舊勢力の一派と見なされる。しかも實は彼こそ、かつて武后册立の動きをいち早く察知し、「唐室の憂は此より始まる」と危惧して長孫無忌らと共に反對を表明した人物なのである。この行動が原因となり、裴行儉は遠く邊境の地に左遷されることとなるが、[23] かかる經歷を考慮すれば、彼が武后の專横に對し少なからず不滿を抱いていたことは想像に難くない。裴行儉はその後、邊境での功績を認められて再び中央官界に復歸し、そこで駱賓王と出會う。つまり、敢えて武后批判に踏み込んだ「帝京篇」の創作態度は、仕官作品としても、裴行儉の共感と信頼を得るための要素を十分に備えた作品であったと言えるのである。

さて、ここまで「帝京篇」について様々な觀點から解釋を試みてきたが、この作品の比興諷諫の要素は、最終句末に至って最も痛烈に現れる。

89 已矣哉　已んぬるかな
90 歸去來　歸りなん
91 馬卿辭蜀多文藻　馬卿は蜀を辭して文藻多く
92 揚雄仕漢乏良媒　揚雄は漢に仕へて良媒乏し
93 三冬自矜誠足用　三冬自ら誠に用ふるに足るを矜るも
94 十年不調幾邅迴　十年 調せられず 幾たびか邅迴す
95 汲黯薪逾積　汲黯の薪は逾いよ積まれ
96 孫弘閣未開　孫弘の閣は未だ開かれず
97 誰惜長沙傅　誰か長沙の傅の
98 獨負洛陽才」　獨り洛陽の才に負くを惜しまん

ここでは、人材登用に對する不滿と自己の不遇を訴えており、駱賓王は自身を「洛陽の才」たる賈誼に比し、その才能を存分に發揮する機會が得られないことを嘆いてこの作品を締め括る。[24] だが、長安の風物を詠むべき「帝京篇」の作中、しかもその最終句末において、「洛陽」の二文字が配されることを、我々は如何に說明したらよいか。確

かに、この「洛陽の才」は、前漢の賈誼に纏わる典故表現に過ぎない。敢えて見過ごすことも出來よう。だが、當時の人々にとって、「洛陽」は敏感に反應せざるを得ない、單なる地名以上の意味を持った。ここには、典故を巧みに用いて眞意を包みつつ、暗に武后批判を仄めかすという駱賓王の意圖が、確かに隱されているのである。

「帝京篇」が、その後裴行儉によって如何なる評價を受けたのかは明らかでない。或いは直後に遭遇した母の死による三年の服喪が、その效力を失わせたかも知れない。だが、この作品は後に、仕官文という枠を超えて多くの人々の間に廣まり、やがて時代の「絶唱」と稱されるに至る。

ここに興味深い記事がある。

自瑗與遂良相繼死、內外以言爲諱將二十年。帝造奉天宮、御史李善感始上疏極言、時人喜之、謂爲「鳳鳴朝陽」。

瑗（韓瑗、六〇六～六五九）と遂良（褚遂良、五九六～六五八）相繼いで死してより、內外 言を以て諱と爲すこと二十年なるに將し。帝 奉天宮を造するに、御史李善感 始めて上疏極言し、時人 之を喜び、謂ひて「鳳鳴朝陽」と爲す。

（『新唐書』卷百五、韓瑗傳）

褚遂良や韓瑗が肅淸された二十年後とは、まさに「帝京篇」の創作時期と合致する。武后が權力を揮った時代、人々は彼女の報復を恐れ、諫言はおろか上奏すらままならぬ狀況を强いられていた。その沈默を破ったものこそ、駱賓王の「帝京篇」ではなかったか。實際に『新唐書』本傳には、彼が度々武后に奏上したことが記されており、[25] 壓政にも屈することのない毅然とした姿勢の一端が窺われる。多くの臣下たちが武后に阿諛する中、ひとり駱賓王のみが堂々「帝京篇」を發表した。李唐室の行く末を案じる人々にとって、それは久々に胸のすく快事であったに違いない。駱賓王の「帝京篇」が、當時「絶唱」と稱贊されたのも、この作品が武后に不滿を持ち、李唐室の實權恢復を熱望する官僚たちの心內をずばり代辯するものだったからではないだろうか。

六 「帝京篇」の文學史上の意義

徐敬業の亂に與した駱賓王は、その後反亂軍が潰滅していく中で、彼らと共に最期を遂げた。「帝京篇」の發表からおよそ十年、光宅元年（六八四年）のことである。これ以降、駱賓王を含む初唐の詩人に對する後人の評價は、動もすれば六朝の氣風を脫し得ない華美な文體であるとして、次第に顧みられなくなっていった。そんな中、駱賓王ら四傑の作品に再び評價を與えたのが杜甫である。

楊王盧駱當時體　楊王盧駱は當時の體
輕薄爲文哂未休　輕薄 文を爲して哂ひ未だ休まず
爾曹身與名俱滅　爾曹 身と名と俱に滅ぶも
不廢江河萬古流　廢れず 江河 萬古に流るるを

（「戲爲六絶句」其二、『杜詩詳注』卷十二）

ここでは、王勃、楊炯、盧照鄰、駱賓王を嘲笑する人々に對する、杜甫の誡めを述べている。確かに彼らの文辭は、六朝の影響が根强く、時に華美で饒舌に過ぎ、後世の人々の目には時代遲れの文體として映ったかも知れない。だが四傑は一方で、文學史に大きな變革をもたら

した。賦の手法を詩歌に持ち込んで作品の長篇化をもたらし、また七言の句形を取り入れて敍情性豊かな描寫を可能にしたのである。[26] 特に駱賓王の「帝京篇」（全九十八句）や「疇昔篇」（全二〇〇句）は、三言、五言、七言の長短句から構成され、盧照鄰の「長安古意」（全六十八句）が七言のみの單調なリズムであるのとは異なる。歌行詩において混成句の體裁を採るのは、初唐においては王勃の「臨高臺」などもあるが、全四十句と比較的短篇で、ここでも「帝京篇」は一線を畫す。混成句による長篇歌行詩が一般化するのは、やはり盛唐に至って李白や杜甫の登場を待たねばならない。

車轔轔　　車　轔轔
馬蕭蕭　　馬　蕭蕭
行人弓箭各在腰　　行人　弓箭　各（おのおの）腰に在り
耶孃妻子走相送　　耶孃　妻子　走りて相送る
塵埃不見咸陽橋　　塵埃に見えず　咸陽の橋
牽衣頓足攔道哭　　衣を牽き　足を頓して道を攔（さえぎ）りて哭す
哭聲直上于雲霄　　哭聲　直に上りて雲霄を于（をか）す
……
君不見　　君見ずや
青海頭　　青海の頭
古來白骨無人收　　古來　白骨　人の收むる無く
新鬼煩冤舊鬼哭　　新鬼は煩冤し　舊鬼は哭し
天陰雨濕聲啾啾　　天陰（くも）り　雨濕（しめ）るとき　聲啾啾たるを

（杜甫「兵車行」、『杜詩詳注』卷二）

杜甫は、三言、五言、七言の字句を自在に用いて多くの歌行詩を生み出したが、その最大の特徴は、現狀の政治に對する痛烈な批判精神にあることは言うまでもない。「兵車行」も、戰爭の悲慘さを眞正面から捉えた作品であり、このような時事性の高い題材を長篇歌行詩に取り入れたのは、これまで杜甫がその端緒とされてきた。

既に述べたごとく、駱賓王の「帝京篇」は太宗の御製作品を意識して創作された。だが、兩者の體裁は大きく異なる。すなわち太宗の「帝京篇十首」が五言詩の連作十篇であるのに對し、駱賓王のそれは全一篇の長篇歌行詩であり、これは樂府歌行體の一種である「篇」に由來する。つまり駱賓王の「帝京篇」は、詩題については太宗に想を得つつ、その內容については諷諫の機能を加えて、新たに樂府題として作り換えたものと言えるだろう。

從來より、李白や杜甫、更には元稹、白居易らへと繫がる長篇歌行詩の先驅的作品として、駱賓王の「帝京篇」が擧げられてきたが、その評價は概して華麗な文辭に留まるものであった。[27] だが、ここに見てきたように、「帝京篇」は、時事に直結し極めて鋭い體制批判にまで踏み込んだ作品である。時の權力者に對して臆することなく敢然と立ち向かった駱賓王の創作態度は、中盛唐における社會批判詩の流れに先鞭を付けた作品として、文學史上新たな價値を見出すことができるのではないだろうか。

注

（1）本稿における駱賓王作品は、清の陳熙晉『駱臨海集箋注』（上海古籍出版社、一九八五年）を底本とした。

（2）上元三年（六七六）洮州道左二軍總管及び秦州鎭撫右軍總管、儀鳳二

年（六七七）安撫大食使、調露元年（六七九）定襄道行軍大總管を拜命（『舊唐書』卷五、高宗本紀、卷八十四、裴行儉傳）。

（3）例えば咸亨元年（六七〇）の吐蕃從軍は、裴行儉の推擧による所が大きい（「詠懷古意上裴侍郎」『駱臨海集箋注』卷四）。また實現はしなかったが、上元三年（六七六）にも裴行儉から再度從軍の要請を受けている（「上吏部裴侍郎書」『駱臨海集箋注』卷八）。しかし、駱賓王は以前、裴行儉にその文章を「華にして實あらず」として一蹴されており（『舊唐書』卷八十四、裴行儉傳）、「帝京篇」に附した啓文は、この裴行儉の發言を踏まえて文學における政治的效用の必要性を意識的に强調したとも考えられる。

（4）楊柳・駱祥發『駱賓王評傳』（北京出版社、一九八七年）所收「駱賓王簡譜」及び王增斌「駱賓王系年考」（『唐代文學研究』廣西師範大學出版社、一九九〇年十月版）は、「帝京篇」創作を上元三年と斷定するが、尙確たる證據を缺く。現存する資料に據る限り、「帝京篇」の創作時期はやはり上元元年から三年の間としておくのが妥當であろう。

（5）清の沈德潛『唐詩別裁集』卷五の語注に「述王侯貴戚游俠倡家之奢僭無度。」とある。尙、我が國における『唐詩選』の注解として①服部南郭（小林新兵衞、一八七六年）、②高木正一（朝日新聞社、一九五五年）、③前野直彬（岩波書店、一九六一年）、④目加田誠（新釋漢文大系十九、明治書院、一九六四年）、⑤斎藤晌（漢詩大系六、集英社、一九六五年）等を參照した。

（6）高木重俊氏は、「駱賓王の「帝京篇」が當時の絶唱と稱されたのも、精神の邊境に身を置く人々に支持されたからに他ならない。心に邊境の思いを抱く彼らは宮廷詩人ではなく、下級官僚あるいは官僚豫備軍的な階層であった」と述べる（『初唐文學論』、研文出版、二〇〇五年、一六八頁）。また駱祥發は「對統治階級腐朽本質的揭露鞭撻、不遺餘力、把自己對社會現實的深沈感觸和憤慨不平之情、一古腦兒傾瀉在筆端。因而叩動了讀者的心弦、引起强烈的共鳴、難怪「絶唱」了」と指摘する（『初唐四傑研究』東方出版社、一九九三年、二六頁）。

（7）始祖と中興の主、すなわち前漢の高祖と宣帝を指す（『漢書』卷八、宣帝紀）。

（8）表作成については、『舊唐書』卷五、高祖本紀參照。尙、第七回目の行幸については便宜上、弘道元年の高宗崩御を以て終了としたが、これ以降、皇后である則天武后は洛陽を據點に政治を展開し、長安元年（七〇一）までの約十八年間、長安には一度も還御しなかった。

（9）「夫帝王之由長安遷居洛陽、除別有政治及娛樂等原因、如隋煬帝、武則天等茲不論外、其中尙有一主因……卽經濟供給之原因是也。」（陳寅恪『隋唐制度淵源略論稿』、新知三聯書店、一九五四年、一四六頁）。

（10）「上以關中饑饉、米斗三百、將幸東都。」（『資治通鑑』卷二〇三、唐紀十九、高宗永淳元年）。

（11）周祖謨「武后時期之洛陽文學」（『厦門大學學報』一九九一年第一期）、郭紹林「洛陽與隋唐政治」（『洛陽大學學報』一九九六年第一期）。

（12）拙稿「二つの『帝京篇』―唐太宗と駱賓王―」（『中國文學論集』第三十九號、二〇一〇年）。

（13）「唐「帝京篇」、太宗御製、褚遂良行書、貞觀十九年八月。」（北宋・趙明誠『金石錄』卷三）。

（14）「余追蹤百王之末、馳心千載之下。慷慨懷古、想彼哲人。庶以堯舜之風、蕩秦漢之弊。用咸英之曲、變爛熳之音。」（『唐詩紀事』卷一）。

（15）記錄としては、李百藥（五六五～六四八年）の「帝京篇」が殘る。但しこれは、太宗の敕命によって「帝京篇十首」に唱和したものである。

（16）「名都篇」については、五臣注で張銑が「時人騎射の妙、遊騁の樂しみありて、國を憂ふるの心を忘るるを刺る」とするように、遊俠の豪奢

な風俗を諷刺するとする説もあるが、これに對し小西昇氏は、曹植が遊俠を好意的に捉えていると論じている（「漢代樂府詩と遊俠の世界―南朝 文學放蕩論の發生―」『日本中國學會報』第十五集、一九六三年）。

(17) 「嘗作「帝京篇」、當時以爲絶唱。然落魄無行、好與博徒遊。」（『舊唐書』卷百九十、駱賓王傳）。

(18) 「少年重英俠、弱歲賤衣冠。既託寰中賞、方承膝下歡。」（「疇昔篇」、『駱臨海集箋注』卷五）。

(19) 前掲注（44）參照。

(20) 岡村繁氏は、洛陽遷都反對派の人々の心情について、「長安在住の長老たちにとっては、かつて首都として殷賑をきわめた長安の市街が、後漢に入って急激に寂れてゆくのと對照的に、今や東のかた洛陽の城市が、天子の偉大な計畫に從って着々と擴充整備され、確實な足取りで新しい首都として定着化しつつある實態は、なんともやりきれない焦燥感に驅り立てるものであったにちがいない。從って、それだけに、彼ら長安の長老たちが、できることならば洛陽がいまだ首都としての機構を十分に備えないうちに、なんとか天子の翻意をうながして再び都を長安に引きもどし、かつての榮光と殷賑を取りかえしたいものと切望したのは、まさに當然すぎるほど當然な地元の心情である」と論じている（「班固と張衡―その創作態度の異質性―」『小尾博士退休記念中國文學論集』所收、汲古書院、一九七六年）。

(21) 拙稿「山東地域における駱賓王の交遊―徐敬業の亂を中心として―」（『九州中國學會報』第四十九卷、二〇一一年）。

(22) 前漢の劉敬は、洛陽に都せんとする高祖に對し、長安の地勢の利を説いて首都としての優位性を主張した。これに張良が贊同したのを受け、高祖は長安定都を決斷した（『漢書』卷四十、婁敬（劉敬）傳、卷四十三、張良傳）。

(23) 「時高宗將廢皇后王氏而立武昭儀、行儉以爲國家憂患必從此始、與大尉長孫無忌、尚書左僕射褚遂良私議其事、大理袁公瑜於昭議母榮國夫人譖之、由是左授西州都督府長史（時に高宗 將に皇后王氏を廢して武昭儀を立てんとす、行儉 以て國家の憂患 必ず此より始まらんとし、大尉長孫無忌、尚書左僕射褚遂良と與に私かに其の事を議るに、大理袁公瑜 昭議の母榮國夫人に於いて之を譖る、是に由りて西州都督府長史を左授せらる）。」（『舊唐書』卷八十四、裴行儉傳）。

(24) 潘嶽「西征賦」（『文選』卷十）に「終童山東之英妙、賈生洛陽之才（終童は山東の英妙、賈生は洛陽の才）。」とあり、歷代の名臣として賈誼の才能を讃える。

(25) 「武后時、數上疏言事、下除臨海丞。鞅鞅不得志、棄官去（武后の時、數ば言事を上疏し、臨海丞に下除せらる。鞅鞅として志を得ず、官を棄てて去る）。」（『新唐書』卷二百一、駱賓王傳）。

(26) 高木正一『六朝唐詩論考』（一九九九年、創文社）、商偉「論初唐詩歌的賦化現象」（『北京大學學報』一九八六年第五期）。

(27) 高棅『唐詩品格彙』敍目に「歌行長篇、唐初獨駱賓王有「帝京篇」、「疇昔篇」、文極富麗。至盛唐絶少、李杜閒有數首、其詞亦不甚敷蔓、大率與常製相類。已混收從彙、不復摘去。迨元和後、元稹、白居易始相尚此製、與號「元白體」。」とある。

【附】則天武后―駱賓王 關係年表

元號　（西暦）	月	則天武后關係年表	駱賓王事跡
永徽６年（655）	7 8 9 10	李義府、武后の皇后册立を進言。 **裴行儉、武后册立に反對。西州（新疆）都督に左遷。** **長孫無忌、褚遂良、韓援、來濟、武后册立に反對。** 褚遂良、潭州（湖南省）都督に左遷。 王皇后の廢位。武后、皇后となる。	651　道王李元慶（高祖の第十六子）の王府屬官となる。
顯慶２年（657）	1 3 8 12	①**洛陽行幸**。 褚遂良、桂州（廣西省）都督に左遷。 褚遂良、更に愛州（ベトナム）刺史に左遷。 來濟、臺州（浙江省）刺史に左遷。 韓瑗、振州（海南）刺史に左遷。 洛陽を東都と改稱。	
３年（658）	2	**長安還御**。	
４年（659）	6 7 10	李義府、『姓氏錄』を編纂、舊勢力の弱體化進む。 長孫無忌、揚州（江蘇省）都督に左遷。 ②**洛陽行幸**。	
５年（660）		高宗と武后による二聖政治始まる。	
龍朔２年（662）	4	**長安還御**。	
麟德元年（664）	12	上官儀、武后の廢位計畫發覺、誅殺さる。 武后による垂簾の政、本格化。	664　道王薨去に伴い失職。
２年（665）	1 10	③**洛陽行幸**。 **長安還御**。	667　奉禮郎となる。
總章２年（669）	4	**裴行儉、吏部侍郎となる。**	670「詠懷古意上裴侍郎」を獻上、裴行儉の推薦を得て西域遠征に從軍。
咸亨２年（671）	2	④**洛陽行幸**。	
３年（672）	11	**長安還御**。	672　姚州（雲南）從軍。
上元元年（674）	8 11	皇帝を天皇、皇后を天后と稱す。 ⑤**洛陽行幸**。	674　この頃、「帝京篇」（674～676）創作、裴行儉に獻上か。
２年（675）	4 12	太子李弘の毒殺。代わって李賢、皇太子となる。 龍門石窟（洛陽）の盧舍那佛像完成。 洛陽宮の修築工事竣工。 北門學士（武后の政治補佐）の活動始まる。	675　武功主簿任官か。
３年（676）	3	**長安還御**。 **高宗、武后に讓位の意思。郝處俊、諫止す。**	676　明堂主簿任官か。 677　母の服喪に入る。
儀鳳４年（679） 調露元年（679）	1 11	⑥**洛陽行幸**。 **裴行儉、禮部尚書に昇進。**	679 長安主簿任官。秋、下獄（武后に對する諫言が原因とも）。
調露２年（680） 永隆元年（680）	8 10	太子李賢の廢位。代わって李顯、皇太子となる。 **長安還御**。	680　秋、恩赦により釋放。 681　夏、臨海丞に左遷。
永淳元年（682）	4	⑦**洛陽行幸**（以後、洛陽に定住）。	
弘道元年（683）	12	高宗崩御。太子李顯の卽位（中宗）。武后の攝政。	
嗣聖元年（684） 光宅元年（684）	2 9	中宗の廢位。代わって李旦、卽位して睿宗となる。 東都（洛陽）を神都と改稱。 **徐敬業（李敬業）の反亂。**	684　徐敬業の亂に參與、檄文を起草す。敗戰後、消息不明となる。
垂拱４年（688）	8	琅邪王李沖、越王李貞の反亂。	
永昌元年（689）	1	明堂にて祭祀を行う（於洛陽）。	
天授元年（690）	9	武周革命。	